

町内遺跡発掘調査報告書

毛作第4遺跡発掘調査
持田古墳群古墳範囲確認調査1

宮崎県児湯郡高鍋町教育委員会

序

本書は、高鍋町教育委員会が平成14年度に実施した弥生時代から古墳時代にかけての2カ所の埋蔵文化財の発掘調査報告書です。

高鍋町大字南高鍋字毛作に所在する毛作第4遺跡の発掘調査と、高鍋町大字持田字西ヶ原に所在する国指定史跡持田古墳群のうち円墳2基の古墳範囲確認調査の成果を収録したものです。

本書が、郷土の歴史を学ぶ教材として、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解、さらには学術研究上において役立つことが出来ますれば幸甚に存じます。

毛作第4遺跡の発掘調査におきましては、特に、同地の地権者には暖かいご理解と多大なるご協力を賜りました。また、持田古墳群内の古墳範囲確認調査におきましては、古墳周囲の畠地の地権者にも暖かいご理解と多大なるご協力を賜りましたこと、心から感謝の意を表する次第であります。

平成15年3月

高鍋町教育委員会
教育長 三重野 保

例　　言

1. 本書は、毛作第4遺跡発掘調査及び国指定史跡持田古墳群の第16号墳・第28号墳範囲確認調査の発掘調査報告書である。

2. 調査は、平成14年度に国庫補助金、県費補助金を導入し、高鍋町教育委員会が実施した。

3. 調査の組織

調査の主体	高鍋町教育委員会		
	教育長	宇田津 英二郎	(平成14年6月まで)
	教育長	三重野 保	(平成14年7月から)
	社会教育課長	岩切 昭一	
	同 課長補佐兼文化財係長	三嶋 俊宏	
	同 文化財係主査	山本 格	(調査員)
調査指導	宮崎県教育庁文化課埋蔵文化財係		
特別調査員	宮崎大学 教授 柳沢 一男 (持田古墳群範囲確認調査)		
	徳島文理大学 専任講師 大久保徹也 (持田古墳群範囲確認調査)		

4. 図面の作成は、山本が行なった。

5. 遺物・図面の整理は、高鍋町教育委員会において、山本が行い整理作業員がこれを補助した。

6. 本書に使用した写真は、山本が撮影した。空中写真については(有)スカイサーバイ九州に委託した。

7. 本書に使用した座標は、測地成果2000で、土地家屋調査士 德田公正に委託した。

8. 本書に使用した方位は磁北で、高さは、海拔絶対高である。

9. 本書の編集・執筆は、山本がおこなった。

総 目 次

毛作第4遺跡発掘調査

本文目次

第1章はじめ	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 立地と環境	1
第2章 調査の概要	3
第1節 調査の概要	3
第2節 壑穴式住居	3
第3節 溝状遺構	5
第4節 土壌	5
第5節 その他の遺構	5
第3章まとめ	6
挿図目次 第1図 調査位置及び周辺遺跡分布図(1/10,000)	2
第2図 遺構分布図(1/100)	7・8
図版目次 図版1 毛作第4遺跡遠景/調査区全景	9
図版2 1号住居跡調査状況/3号・4号住居跡調査状況	10
図版3 5号住居跡調査状況/6号住居跡調査状況	11
図版4 7号・8号・9号住居跡調査状況 ／12号・13号住居跡・遺構3調査状況	12
図版5 1号住居跡遺物出土状況/2号住居跡遺物出土状況	13
図版6 3号住居跡遺物出土状況/4号住居跡遺物出土状況	14
図版7 5号住居跡遺物出土状況/6号住居跡遺物出土状況	15
図版8 7号住居跡遺物出土状況/8号・9号住居跡遺物出土状況	16
図版9 10号住居跡遺物出土状況/11号住居跡遺物出土状況	17
図版10 12号住居跡遺物出土状況/遺構1遺物出土状況	18
図版11 遺構2・1遺物出土状況/1号土壌遺物出土状況	19
図版12 2号土壌遺物出土状況/防空壕跡調査状況	20

持田古墳群古墳範囲確認調査 1

本文目次

第1章 はじめに	22
第1節 調査にいたる経緯	22
第2節 立地と環境	22
第2章 調査の概要	24
第3章 まとめ	24
挿図目次 第1図 調査地位置及び周辺遺跡分布図（1／10,000）	23
第2図 トレンチ位置図（1／200）	25
図版目次 図版1 16号墳2号・3号・4号トレンチ調査状況	26
図版2 28号墳2号・3号・4号トレンチ調査状況	27
調査抄録	28

第1章 はじめに

第1節 調査にいたる経緯

宮崎県児湯郡高鍋町大字南高鍋字毛作8705番地において、土地所有者による現況地面を掘削して宅地の造成工事の計画があった。当該地は、「毛作第4遺跡」として周知された区域内であった。

平成13年4月に高鍋町教育委員会と土地所有者による協議を行い、現況での遺跡の保存は困難であるため、やむをえず、工事区域内について、埋蔵文化財の記録保存の措置を取ることになった。平成13年度は、高鍋町教育委員会の他の事業との調整が困難であることから、翌平成14年度に調査を実施することになった。

第2節 立地と環境

高鍋町は、東に日向灘に面し、市街地がひろがる海拔約10m未満の沖積平野を北・西・南から、海拔約50mから約70mの洪積台地に取り囲まれた地形をしている。

当地は、この沖積平野の南西にあたる標高約75mの洪積台地の縁辺に位置しており、台地面に発生した小沢がつくる谷が南から東へ走っている。そのため、調査地は、南に開けており、台地縁辺にある。

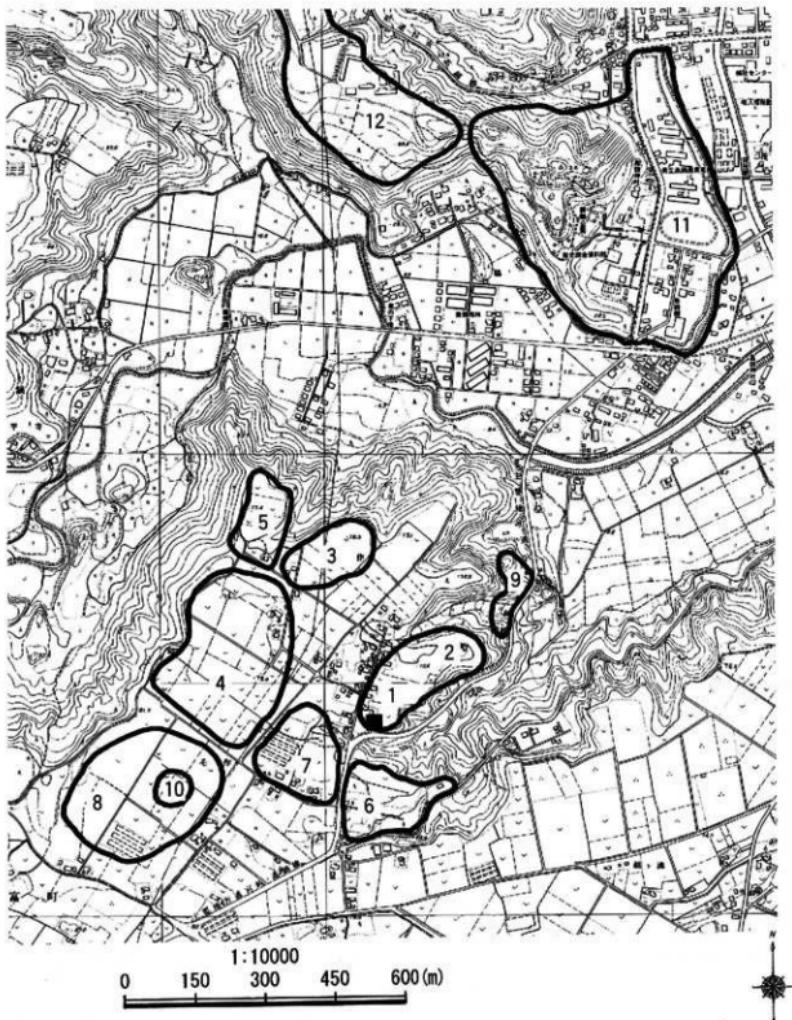
この付近は毛作原と呼ばれ、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が密集している。小字の毛作の箇所に4つの遺跡が、その付近でも3つの遺跡が周知されている。発掘調査等は行なわれていないが、踏査によると弥生時代から中世にかけての遺跡と考えられている。

また、発掘調査地の南西約300mを隔てる台地面には、小字を四ツ塚といい円墳が4基所在している。この古墳群は、昭和12年7月2日に宮崎県指定史跡高鍋町古墳の第2号墳から第5号墳として指定され保存されている。さらに、当地の北東約450mを隔てる台地斜面には、7基の光音寺横穴墓群があり、宮崎県教育委員会により調査されている。(注1)

南北朝の時代には、財部(今の高鍋)にあった財部土持氏が、当地の北北東約1kmに財部城に居城した。康正二年(1456)に財部土持氏は、都於郡領主伊東氏との間で、当地の毛作原付近において戦いをおこない、敗北を喫した。その後、伊東氏がこの地を治めるにいたる。

江戸時代には、高鍋藩秋月氏の所領となり、高鍋城の南の方向(現在の新富町方面)から城下にいたる道ぞいに武士を住まわせて警護につかせたのが、今日に残る毛作集落の中心部である。今回の発掘調査地は、近世から続くこの道路に面した箇所である。

※注1 石川恒太郎「高鍋町光音寺横穴調査報告書」「宮崎県文化財調査報告書第17集」・「宮崎県文化財調査報告書第18集」 宮崎県教育委員会 1973



- | | | |
|-------------------|-------------|-------------|
| 1 調査地 | 2 毛作第4遺跡 | 3 毛作第1遺跡 |
| 4 毛作第2遺跡 | 5 毛作第3遺跡 | 6 山伏山第1遺跡 |
| 7 山伏山第2遺跡 | 8 四ツ塚遺跡 | 9 光音寺横穴墓 |
| 10 毛作古墳(県史跡高鍋町古墳) | 11 高鍋(財部)城跡 | 12 大戸ノ口第3遺跡 |

第1図 調査地位置及び周辺遺跡分布図 (1/10,000)

第2章 調査の概要

第1節 調査の概要

毛作第4遺跡の発掘調査は、宅地造成工事により削平をおこなう箇所を調査区として全面を本発掘調査することとした。調査は、平成14年5月8日に開始した。重機による表土のはぎ取りを行なった後に、遺構検出の作業をおこなった。その結果、溝状遺構2条、竪穴式住居跡13軒、土壙2基、柱穴、防空壕跡などを検出した。各遺構の精査について、平成15年3月末まで実施したところで、平成14年度の調査については終了した。発掘調査面積は、約720m²であった。

発掘調査区内の各遺構について補足調査・記録等の作業が未了であるが、これについては、平成15年度に高鍋町教育委員会が実施する事業で現地調査を完了する予定である。

第2節 竪穴式住居

この発掘調査区における遺構の中心となるのが竪穴式住居跡である。13基の住居跡を検出したが、住居跡どうし切り合うものが多く、このほかに住居跡と考えられる遺構が3カ所あるが、住居跡の数には、さらなる検討を要する必要がある。弥生時代と考えられる住居跡が8軒であり、古墳時代の住居跡が1軒である。時期の特定にいたっていない住居跡が4軒である。

1号住居跡

この住居跡は、発掘調査区の南辺東寄りに位置し、住居の南辺部分は、発掘区外で検出不能であった。平面のプランは隅丸方形で東西の一辺は約5mである。東辺の輪郭は不明瞭であった。壺が出土している。

2号住居跡

発掘調査区の東辺南寄りに位置し、住居の東辺部分は、発掘区外で検出不能であった。平面のプランは隅丸方形で南北の一辺は5.4mである。中央部分は、2.4m×1.2mの範囲で後世の攪乱を受けている。

3号住居跡

2号住居跡の北に位置し、住居の東辺部分は、発掘区外で検出不能であった。平面のプランは円形で直径は5.8mである。中央部分は、一辺を3.1mの範囲で（推定）方形に床面を掘り下げ、その周囲はベット状遺構をもつ。弥生時代の中期と考えられる住居である。土器片を出土している。4号住居跡が後に作られたため、そのプランは一部不明瞭である。

4号住居跡

3号住居跡の北西に位置する。後に作られた溝状遺構に攪乱されその平面プランは、不明瞭であるが、一辺が約4.5mの方形か隅丸方形であるものと推定される。この住居は、後世の柱穴と考えられる遺構も複合している。

5号住居跡

調査区の北辺の東隣で、4号住居跡の北に位置する。住居の北部分は、発掘区外で検出不能であった。平面プランは円形を示し、直径は約6.5mである。住居の西の一部を後の溝状遺構と重複している。住居の中央には、床面を円形に直径約4.3mの範囲を掘り下げており、周囲の床面はベット状になる。弥生時代の中期と考えられる住居である。壺などの土器片を多く出

土している。

6号住居跡

調査区の北辺の中央部で、5号住居跡の西に位置する。住居の北部分は、発掘区外で検出不能であった。平面のプランは、円形を示し直径は約7.6mである。住居跡の東部分は、後世の溝が複合し攪乱を受けている。この住居跡からは、壺などの土器片や石包丁などの石器が出土した。この6号住居跡については、その区域内に隅丸方形とみられる遺構や方形の遺構が確認されている。別の平面プランをもつ住居跡が複合している可能性が考えられる。

7号住居跡

調査区のほぼ中央のやや北よりで、6号住居跡の南に位置する。平面のプランは5.3m×4.2mの方形で、壺などの土器片や石錐片などが出土している。住居の中央から南により、1.5m×1mの規模で床面を掘りくぼめている。住居の西南隅は8号住居跡と重複している。

8号住居跡

調査区のほぼ中央の西よりに位置している。平面のプランは方形で一辺は約3.1mである。住居跡の北東部分は7号住居跡と複合し、東辺は、攪乱により不明瞭である。東北隅から壺などを出土している。

9号住居跡

調査区のほぼ中央の西よりに位置している。8号住居跡とその多くの部分を重複している。平面のプランは、方形を示すと考えられる。住居跡の西辺部分は明確であるが、ほかは不明瞭である。

10号住居跡

調査区の北辺の中央部西よりで、住居跡の東端を6号住居跡の西の一部に重複し、同西側部分を11号住居跡に重複して位置する。住居の北部分の大半は、発掘区外で検出不能であった。平面のプランは方形で一辺は約4.4mである。ここより壺・皿など大量の土器片が出土した。

11号住居跡

調査区の北辺の西よりで、住居跡の東端を10号住居跡の西の一部に重複して位置する。住居の北半分は、発掘区外で検出不能であった。平面のプランは円形で直径は6.2mである。床面の中央を一辺約2.4mの方形に掘り下げ、周囲はベット状を示す。弥生時代の住居跡である。

12号住居跡

調査区の北西に位置する。平面のプランは、方形で5.0m×4.4mである。住居の東辺には壺が良好に残る。住居の西辺は、13号住居跡と重複し不明瞭である。壺などの土器片を多数出土している。古墳時代の壺をもつ住居跡として好例である。

13号住居跡

調査区の北西に位置する。12号住居跡の南西部分に重複する。平面のプランは、方形を示し4.6m×4.2mであると推測される。この住居跡は、その西南部分にも別の住居跡が重複しているため、住居跡の形状は不明瞭である。

住居跡と考えられる遺構

- 遺構 1 4号住居跡の西に位置する。平面は方形のプランと推測される。判明した一辺は、5.4mであるが、住居跡の東半分以上が、後に作られた1号溝により攪乱を受けている。
- 遺構 2 4号住居跡の西で遺構1の南に位置する。遺構1とその北部は重複する。平面は方形のプランと推測される。判明した一辺は5.9mであるが、住居跡の東半分以上が、後につくられた1号溝により攪乱を受けている。
- 遺構 3 12号住居跡の西に位置する。輪郭が不定形で、花弁型住居跡の可能性もある。

第3節 溝状遺構

1号溝

調査区の東部に位置し、調査区を南北に縦貫する。幅は、約1.8mで近世のものを含む土器片も出土した。近世ごろに作られた溝と考えられる。

2号溝

調査区の東部に位置し、1号溝と約2m西へ隔て並行し、調査区の南端付近で不明瞭となる。幅は、約1.8mで、作られた時期は不明である。

第4節 土壌

1号土壌

調査区の東南隅に位置する。一部は、調査区の外にわたる。土器片を出土した。

2号

調査区の北西隅に位置する。1.7m×1.3mの梢円形を示す。壺や須恵器片を多く出土した。

第5節 その他の遺構

防空壕跡

2号住居跡の西に接して位置する。平面は方形のプランで、3.5m×2.7mの方形を示す。地権者の証言により、太平洋戦争中に作られた防空壕跡である。

第3章 まとめ

毛作第4遺跡のうち今回の調査区は、同遺跡範囲の南西隅に位置する。同区は、南側を既に道路造成工事等により、住居の営まれた面を削平されており、調査区の西側についても台地面の削平を受けていた。このため、当該区域については、今回確認できた住居跡等の遺構数よりさらに多くの住居跡等の遺構があったものと推測される。

発掘区域の北側・東側・南側について、住居跡の平面プランの半分程度を調査区外にまたがる住居跡は7軒である。のことから、今回の発掘区の北側・東側には、密度の高い集落跡が形成されていた可能性が高い。当町付近の洪積台地の特に縁辺部には縄文から古墳時代にかけての集落が所在する傾向が強い。当地においてもその範囲にあるといえる。今後の周辺のさらなる発掘調査の機会とその成果を待ちたい。

今回の、毛作第4遺跡の発掘調査おいては、当初の想定よりも多くの竪穴式住居跡が密な状態で検出された。当遺跡全体のごく一部の調査であったが、中心となる時代は、弥生時代から古墳時代である。その後の時代の柱穴等の遺構も検出されている。これらの検討を進めていきたい。

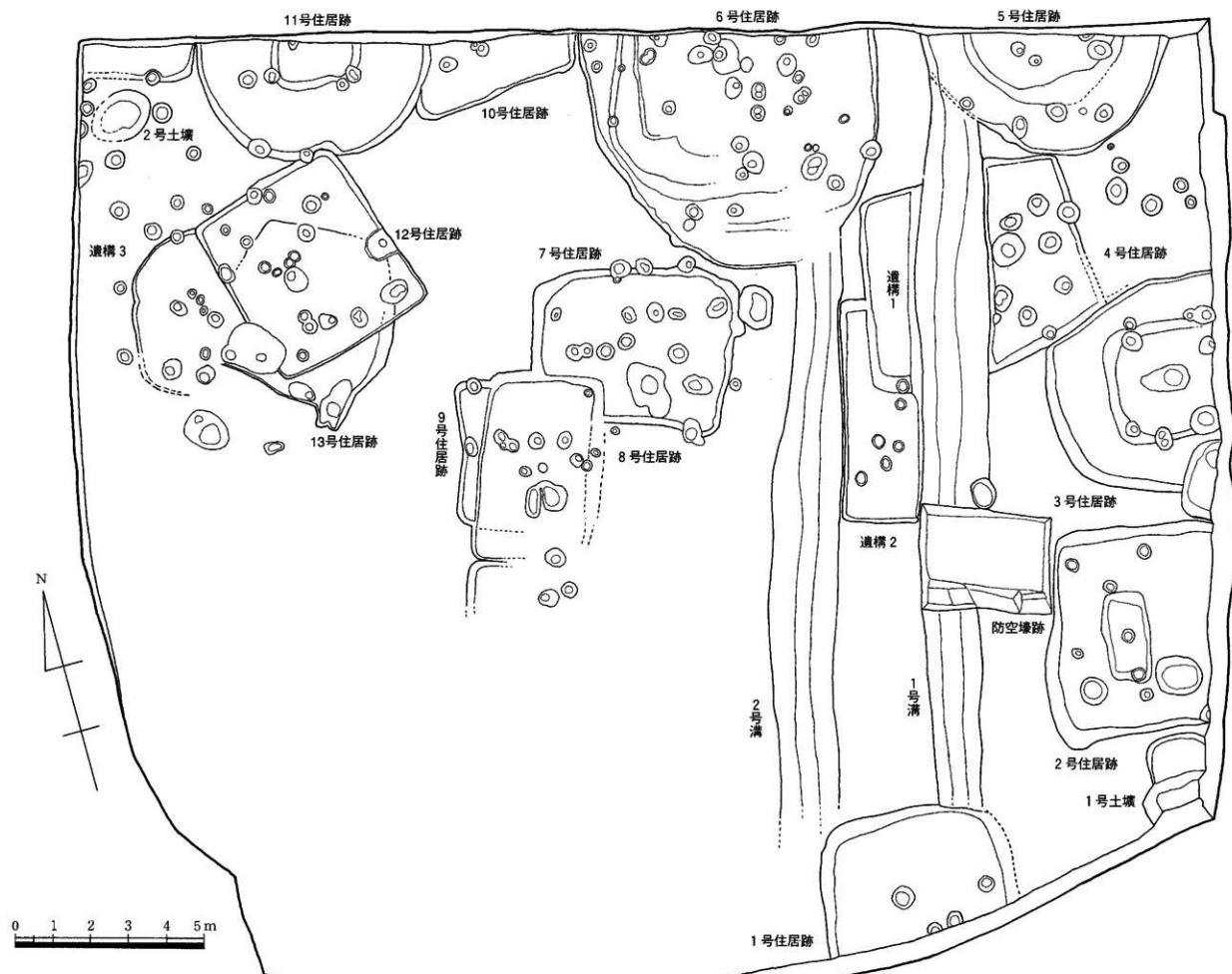
弥生時代の竪穴式住居跡では、中央部分の床面を方形や円形に掘りくぼめて周囲との段差を設ける、いはゆるベット状の遺構をもつものが3軒確認できた。これらは、いずれも平面のプランは、円形を示すものである。そのほかには、平面のプランが方形または、隅丸方形をもつものが4軒確認できた。円形を示すものは、1軒である。

古墳時代の竪穴式住居跡では、12号住居跡で、平面のプランが方形で東辺に竈をもつ住居跡を検出した。竈の遺存も良好であり、この時代の竈をもつ住居としては県内においても好例である。今後の住居研究の有用な資料となるものである。

時期不明の住居跡の検出も4軒あった。住居跡の遺存状況の良好でないものや、隣接する住居跡等との切り合いが多くみられたりしたため。各々の住居跡のプランを確認することが困難なものもあった。特に、6号住居跡については、平面のプランは、だ円形に近い形状であり、床面の状況から、方形プランの住居跡と円形プランの住居跡が域内に所在する可能性も考えられる。これらについても詳細に検討する必要がある。

今回の調査地付近には、古墳時代の中期から後期と考えられる毛作古墳や光音寺横穴墓群が所在している。この遺跡は、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡で、住居跡の分布が密であることから、規模の大きな集落が営まれたことがいえる。この集落に生活した人々と、毛作古墳や光音寺横穴墓群との関係が強いものと考えられる。

毛作古墳や光音寺横穴墓群のうち、毛作古墳の調査については調査歴がないので、これらとの関連性を考察するうえで、今回の毛作第4遺跡発掘調査では大きな成果を得ることができた。



第2図 遺構分布図 (1/100)



毛作第4遺跡
遠景
(南から)



調査区全景
(上が南)

図版 2



1号住居跡
調査状況
(上が南)

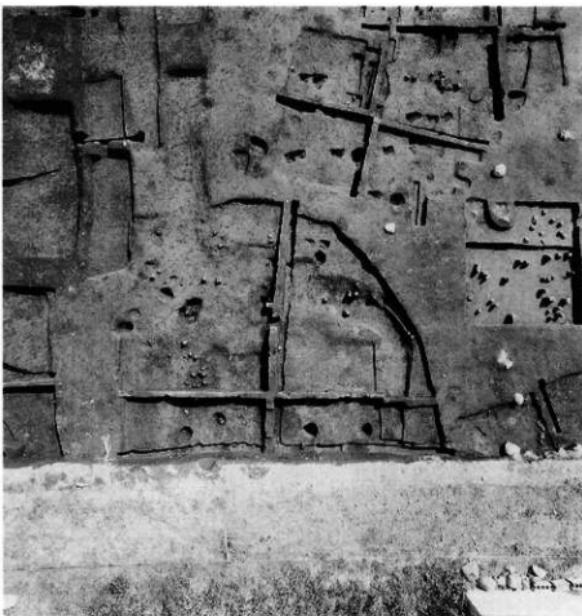


3号住居跡
(中央)
4号住居跡
(右下)
調査状況
(上が南)

図版 3

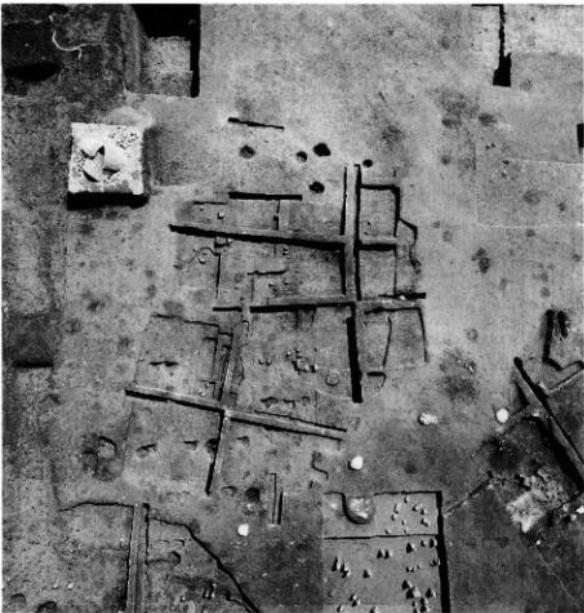


5号住居跡
調査状況
(上が南)

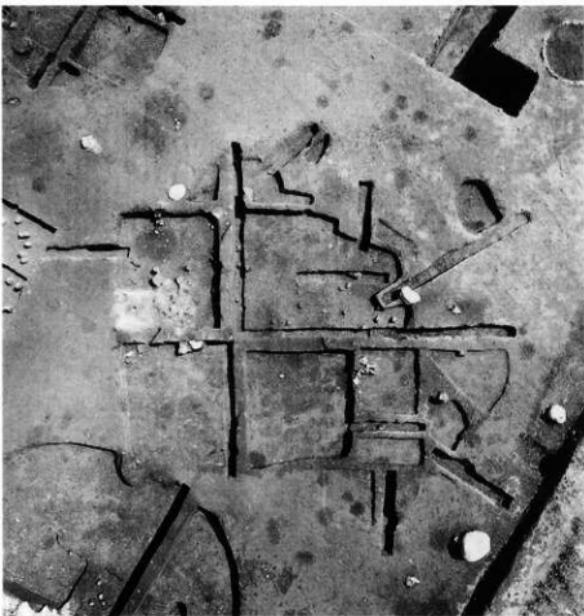


6号住居跡
調査状況
(上が南)

図版 4



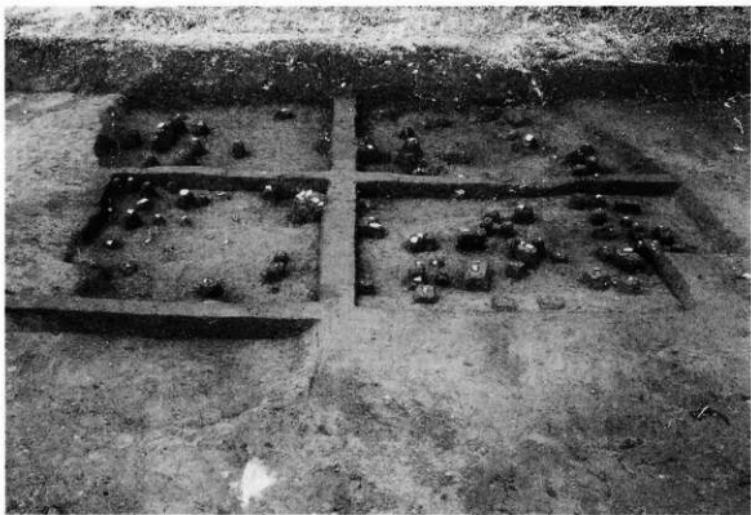
7号住居跡
(中央より左下)
8号住居跡
9号住居跡
(中央)
調査状況
(上が南)



12号住居跡
13号住居跡
遺構 3
調査状況
(上が南)



1号住居跡遺物出土状況（北から）



2号住居跡遺物出土状況（西から）

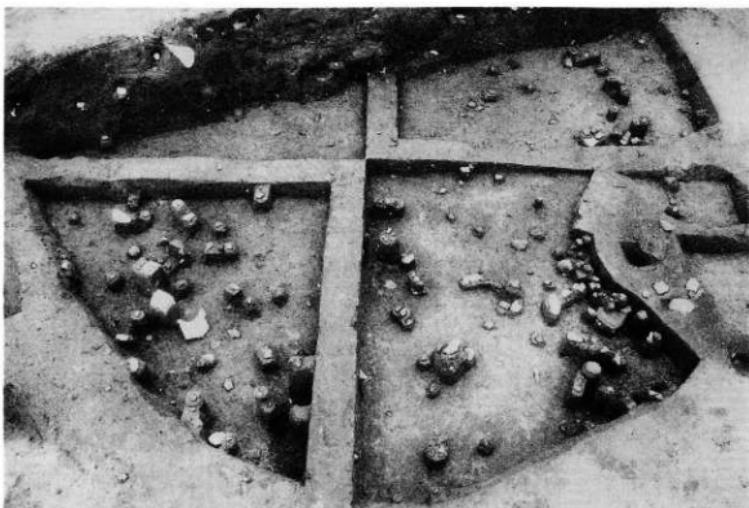
図版 6



3号住居跡遺物出土状況（西から）



4号住居跡遺物出土状況（北から）

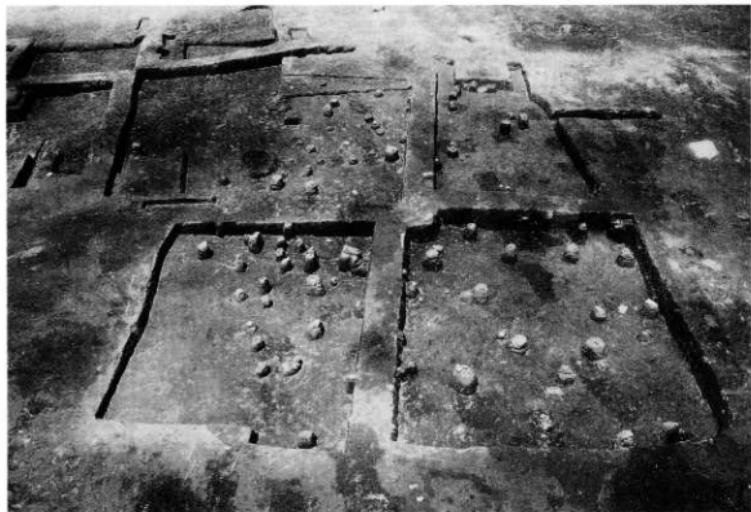


5号住居跡遺物出土状況（南から）

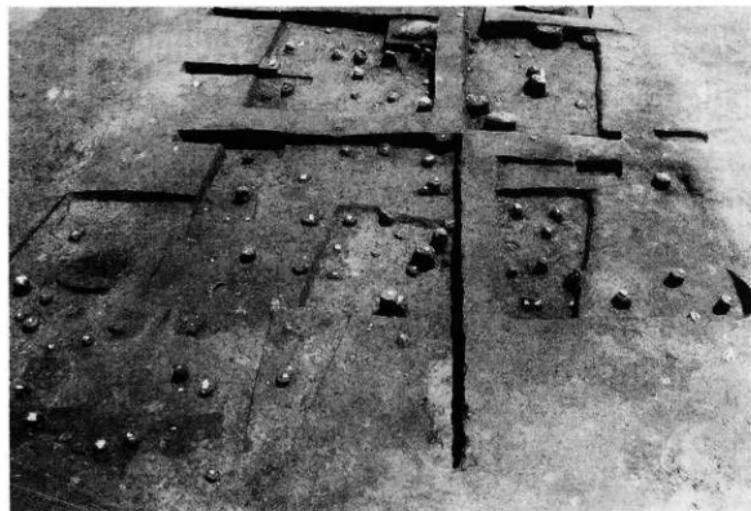


6号住居跡遺物出土状況（東から）

図版 8



7号住居跡遺物出土状況（東から）



8号・9号住居跡遺物出土状況（北から）



10号住居跡遺物出土状況（北から）



11号住居跡遺物出土状況（南から）

図版10



12号住居跡遺物出土状況（南から）



遺構1 遺物出土状況（西から）



遺構2（手前）
遺構1（奥）
遺物出土状況
(南から)



1号土壤遺物出土状況（西から）

図版12



2号土壤遺物出土状況（北から）



防空壕跡調査状況（南から）

持田古墳群古墳範囲確認調査 1

第1章 はじめに

第1節 調査にいたる経緯

宮崎県児湯郡高鍋町大字持田には、昭和36年に国の史跡指定を受けた持田古墳群がある。この古墳群を保存し公開することを目的として、平成13年度に高鍋町教育委員会が、持田古墳群整備計画書を策定した。この計画書は、同古墳群の長期にわたる整備の基本計画である。

この計画をもとに、古墳群の整備に必要な基礎資料の収集を行なうこととなった。そのひとつとして、各々の古墳の範囲確認調査を実施するにいたった。平成14年度については、円墳の第16号古墳と第28号古墳について、古墳範囲確認調査を実施することになった。

第2節 立地と環境

高鍋町は、東に日向灘に面し、市街地がひろがる海拔約10m未満の沖積平野を北・西・南から、海拔約50mから約70mの洪積台地が取り囲む地形をしている。この沖積平野を九州山地に発した小丸川が北東から南東に貫流し日向灘にそそぐ。

持田古墳群の主群は、この沖積平野の北辺で小丸川の北岸にあたる標高約60mの洪積台地の縁辺に位置しており、台地面に発生した沢がつくる谷が北から東へ走り、舌状に張り出す台地面に位置する。ここには、前方後円墳9基と円墳60基が分布する。この台地面には、持田遺跡として周知され弥生時代末期の住居跡も確認されている。

持田台地の舌状の南端には、持田中尾遺跡が知られる。旧石器、縄文、弥生前期～後期、古墳時代にわたる遺跡で、弥生時代の竪穴式住居跡2軒、割竹形木棺をもつ円墳が調査された。

同台地の東の谷を隔てた対岸の台地には、上ノ別府遺跡があり、古墳時代後期の竪穴式住居跡9軒が検出された。同台地の北の谷を隔てた対岸の台地には、下り松遺跡があり、縄文から弥生時代の遺跡として周知されている。

さらに、同台地の東端の裾部の微高の平坦面は、東光寺遺跡があり、古墳時代の遺跡である。ここには、室町時代の永祿五年（1562）に建立の十三仏板碑（笠塔婆）がある。

江戸時代には、古墳群の西辺の台地面を高鍋藩主は参勤交代の道としていた。

昭和40年代になり、古墳群周囲の畠地に、ほ場整備事業が実施され今日の景観となった。

【参考文献】

『お染ヶ岡特殊農地保全事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1979 宮崎県教育委員会

『持田中尾遺跡』1982 高鍋町教育委員会

『高鍋町史』1987 高鍋町教育委員会

『高鍋町遺跡詳細分布調査報告書』1989 高鍋町教育委員会



- | | |
|--------------|--------------|
| 16 16号墳（調査地） | 28 28号墳（調査地） |
| 1 持田古墳群・持田遺跡 | 2 持田中尾遺跡 |
| 3 東光寺遺跡 | 4 上ノ別府遺跡 |
| | 5 下り松遺跡 |

第1図 調査地位置及び周辺遺跡分布図 (1/10,000)

第2章 調査の概要

古墳範囲確認調査は、第16号古墳と第28号古墳について、平成15年3月に開始し、同年3月末に終了した。8本のトレーニングによる調査面積は49m²である。

第16号古墳は、現況で直径約16mの円墳、墳丘は高さ約2.7mである。古墳の形状は、一辺約14mの方形を示す。国指定古墳の区域を示す杭は、現況の裾部に設置してあり、周囲の畠地面より高い箇所に設置してある。墳頂に杭が設置してあり、この位置の国土座標と海拔高を測定した。古墳範囲確認のために、墳丘の四方に、国指定区域の外に裾部から設定した。1号から4号まで、幅約1mで4本のトレーニングを各々90度の角度を隔てて設定した。

1号・2号・3号トレーニングでは、耕土下に地山面を検出、古墳周溝は確認できなかった。4号トレーニングでは、墳丘から90cmを隔てた箇所で耕土下に、幅約125cm、深さ約14cmの規模で古墳周溝の底部を確認した。

第28号古墳は、現況で直径約10mの円墳、墳丘は高さ約1.7mである。古墳の形状は、一辺約6mの方形を示す。国指定古墳の区域を示す杭は、現況の裾部に設置してあり、周囲の畠地面より高い箇所に設置してある。墳頂に杭が設置してあり、この位置の国土座標と海拔高を測定した。古墳範囲確認のために、墳丘の四方に、国指定区域の外に裾部から設定した。1号から4号まで、幅約1mで4本のトレーニングを各々90度の角度を隔てて設定した。

1号・2号トレーニングでは、耕土下に地山面を検出、古墳周溝は確認できなかった。3号トレーニングでは両壁面で古墳周溝の底部を確認した。この東壁面では、墳丘から220cmを隔てた箇所で耕土下に、幅210cm、深さ30cmの規模で古墳周溝の底部を確認した。このトレーニングでは、須恵器の小片が出土した。4号トレーニングでは、南壁面でのみ墳丘から100cmを隔てた箇所で耕土下に、幅約140cm、深さ約25cmの規模で古墳周溝の底部を確認した。

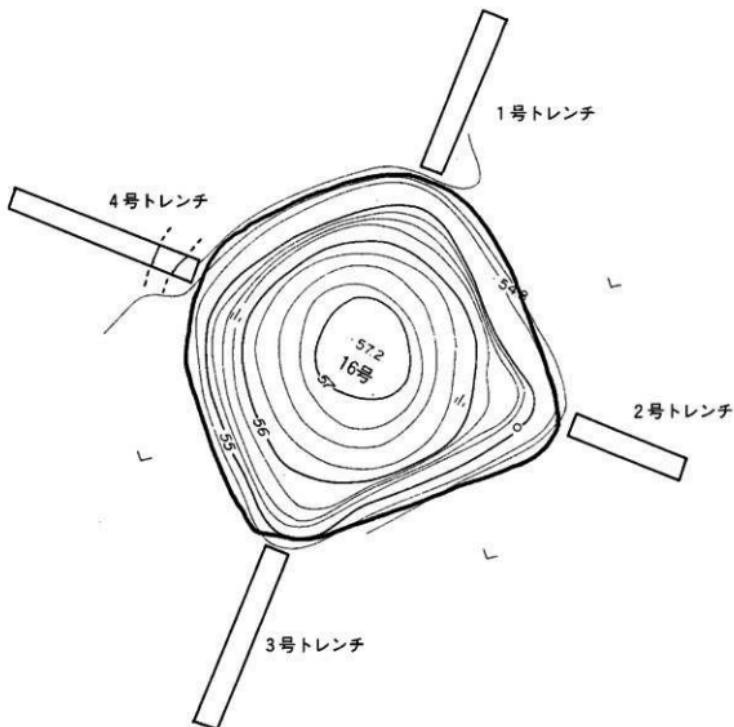
第3章 まとめ

持田古墳群の周囲は、ほ場整備のため古墳築造時の地形とは大きく異なることが想定された。しかし、今回の2基の古墳について調査した結果、古墳の周溝の底部分が、一部において遺存することが確認できた。このことから、調査した古墳は、周溝を持つ古墳であることが確認できた。

第16号墳では、古墳周溝の遺存状況が良好でないことが確認できた。第28号墳では墳丘の現在の高さとの差が小さい、浅い溝であったことが推測できる資料を得た。

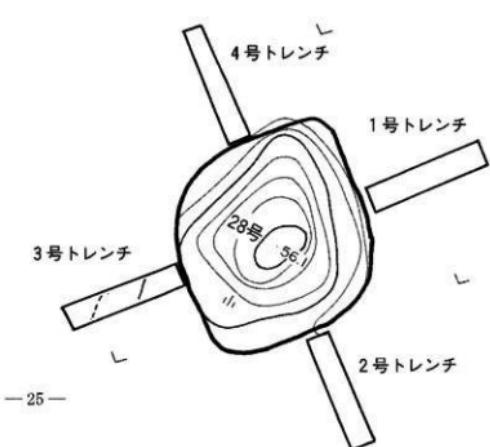
今回の調査により、ほ場整備等による古墳周溝への影響はあるものの、一部ではその確認が可能であることが判明した。あわせて、かつての地形復元のための資料を得ることもできた。

古墳周溝は、各方向に設定した調査トレーニングにおいて所在が確認できることにより、築造当時の古墳範囲を確認できるものである。今回の調査成果をもとに、今後の古墳範囲確認調査に生かし、古墳群整備に向けてより多くの資料を収集していきたい。



0 5 10m

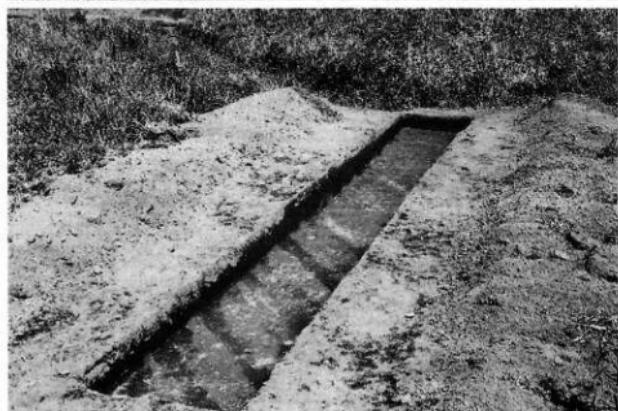
第2図 トレンチ位置図 (1/200)



図版 1



16号墳
2号トレンチ
調査状況
(南東から)



16号墳
3号トレンチ
調査状況
(南東から)



16号墳
4号トレンチ
(埴丘付近)
周溝確認状況
(南西から)

図版2



28号墳
2号トレンチ
調査状況
(南から)



28号墳
3号トレンチ
周溝確認状況
(西から)



28号墳
4号トレンチ
調査状況
(西から)

調査抄録

ふりがな	チヨウナイイセキハツツチヨウサホウコクショ							
書名	町内遺跡発掘調査報告書							
副書名	毛作第4遺跡発掘調査 持田古墳群古墳範囲確認調査1							
卷次								
シリーズ名	高鍋町埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第9集							
編著者名	山本 格							
発行機関	高鍋町教育委員会							
所在地	宮崎県兒湯郡高鍋町大字上江1138番地							
発行年月日	2003年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市 町村	遺跡 番号					
毛作第4遺跡	宮崎県兒湯郡 高鍋町大字 南高鍋字毛作	45401	3012	32° 06' 48"	131° 29' 49"	20020508 20030329	720	個人 宅地造成
持田古墳群 第16号墳 第28号墳	高鍋町大字持田 字西ヶ原	タ	1001	32° 09' 00"	131° 31' 07"	20030317 20030330	49	古墳 範囲確認
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
毛作第4遺跡	集落	弥生	竪穴住居	弥生土器 磨製石器		弥生時代から古墳時代 にかけての集落跡		
持田古墳群 第16号墳 第28号墳	古墳	古墳	古墳周溝			円墳の周溝の底部を確認		

高鍋町埋蔵文化財調査報告書 第9集
町内遺跡発掘調査報告書

毛作第4遺跡発掘調査
持田古墳群古墳範囲確認調査1

2003年3月

編集・発行 宮崎県児湯郡高鍋町教育委員会
印 刷 徳印刷センタークログ
宮崎市大橋2丁目175番地
〒880-0022 電話24-4351番

